

高専卒業留学生を含めた高専卒業生

ネットワークコミュニティの構築

-1 教員の試み-

全国高専卒業生ネットワーク代表 佐藤 義隆

SATO Yoshitaka

キーワード： 高専卒業生、留学生会、ネットワークコミュニティ

1. はじめに

国立高専は1983年から留学生を受け入れている。留学生は母国での厳しい選抜を経た優秀な人たちが殆どであり、卒業後は、母国へ戻る者、日本の大学3年次に編入する者、さらに大学院へ進学する者など様々であるが、残念ながら、ほとんどの高専において卒業後彼らとの関係が途絶えてしまっているのが実情である。

筆者は第1期高専留学生の数学教育に関わり、さらに科研費により留学生出身国を訪問調査し、その過程で卒業留学生のネットワーク構築の必要性を強く感じ、その構築へ向けて努めてきた。

本報告は、団体・組織等による留学生支援の成果報告とは異なり、教員個人による卒業留学生支援に至る40年間の取り組みについて、これまでの過程と現在の状況、そして今後のことについて述べる。団体・組織における支援事例の提示・報告とは異なるものであることを最初にお断りしておく。

2. 高専での留学生受け入れ状況

留学生受け入れは1983年に始まり、毎年約160人を受け入れており、2013年現在までに延べ4,500人以上になると思われる。

留学生出身国は、インドネシア、ベトナム、タイ、ラオス、ミャンマー、カンボジア、スリランカ、モンゴル、韓国、フィリピン、バングラデシュ、パキスタン、フィジー、インド、イラン、メキシコ、アルゼンチン、コロンビア、ブラジル、ペルー、ウガンダ、ガボン、ケニア、モロッコ、マダガスカル、ザンビア、ルワンダ、カメルーン、セネガル、エチオピア、ブルネイ、チュニジア、マレーシアの34カ国である。

国費留学生は母国で留学選抜試験に合格し、来日して1年間の日本語予備教育の後、高専へ配属される。マレーシアは、マレーシア政府留学生で、かつては国費留学生と同様であったが、近年は母国で日本語等を学習した後、直接日本の高専へ留学するようになっている。

3. 筆者の留学生ネットワーク構築への動機

筆者は1974年に東京高専に数学教員として就任した。就任直後から高専生の優秀さと直向きでまじめな性格に感心した。しかし、その後担任を受け持ち、卒業生を送り出すに至り、高専卒業生は就職した企業によっては、4年制大学卒業生より軽んじて待遇されるケースが少なからずある事を知った。(現在はそのようなことは殆どないと思うが、当時はそのような状況であった。)そこから、高専卒業生が社会的に正しく評価されるためには、卒業生は結束し、もっと自己を主張した方がよいと考えるようになり、やがて「全国高専卒業生ネットワーク」の構想につながっていった。

東京高専では1983年から留学生を受け入れ、筆者はそれ以降定年退職するまで殆ど毎年留学生の数学教育(授業、個人指導)を担当してきた。留学生は優秀な人たちばかりであるが、学習してきた数学内容や学習範囲、数学に対する基本的な考え方が国によって若干差異があると感じていた。

筆者は、2000年から通算で4年間、国費留学生現地選抜試験(数学)の問題作成に、携わる機会があった。数学の統一問題の作成にあたり、各国の数学教育事情を知りたいと考えたが、その種の調査資料は皆無であることが分かった。そこで、科研費を申請して各国の状況を調査することとした。

まず、高専に在籍している全留学生へのアンケート調査を2度実施し、数学教育に関する事、留学生活に関する事の情報を得て、留学生出身国への現地訪問調査を行った。(科研費による調査は、2001年から2010年間の通算6年間、それ以外は私費による調査)

調査訪問国はベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマー、スリランカ、インド、フィリピン、モンゴル、韓国、中国、イラン、チュニジア、マレーシア、インドネシアの14カ国である。現地では高専卒業留学生に通訳を依頼し、留学関係機関を訪ねた。

筆者は、JICAに短期専門家として関わった経験があり(インドネシア教育大学における理数科教育改善、1999年～2004年)、その関係からJICAのネットワークを利用して頂いた。訪問国に滞在する長期専門家たちの協力により、数学教育のみならず、当該国における社会、教育全般、経済等の情報も得て、留学生を取り巻く環境についても知ることができた。

現地で卒業留学生と面談した結果、次のことが分かった。

- ・彼らはみな一様に高専を懐かしみ、日本を第2の母国と慕っている。
- ・卒業した高専との関係が途絶えてしまっていることを残念がっている。
- ・産業・技術環境の整備が遅れていて、エンジニアとしての能力を十分に発揮できない状況の国もある。
- ・技術や仕事の助言が欲しいときがある。

厳しい選抜を経て選ばれ、日本でしっかり勉強した留学生が、卒業後、高専とも日本とも関係が途絶えてしまっていることは筆者にとって残念なことと思われ、「高専卒業留学生のネットワーク」の必要性が痛感された。

2007年にこのネットワーク作りに着手した。

4. 卒業留学生の支援について

留学生支援については、いろいろな団体や大きな組織が様々な取り組みを行っている。それらは留学生のニーズを踏まえて、あるいは組織・団体が必要と考える企画をし、主催者の立場から卒業留学生へ投げかけるものが多いと思われる。親善・交流会、奨学金支援、セミナー等々である。

ところで、筆者が中心となって目指しているものは、卒業留学生及び日本人高専卒業生を中心としたネットワークコミュニティ（以後ネットコミュニティと略す）の構築である。ネットコミュニティでは、構成員自身が発案したことを、構成員が対応し、運営者が手伝って企画等を実行する構成員間の双方向的なものである。

高専卒業生は既に40万人を超え、日本のエンジニアの13%を占めるに至り（総務省統計）、日本の工業技術に関連した殆どの分野の第一線で活躍している。海外在住の卒業留学生にとっては、これら高専卒業生の持つ技術、業務等に関連した情報は貴重であり、また日本人卒業生にとっても、諸外国に住む現地技術者からの信頼できる情報は貴重な時代となっている。

さらに双方の卒業生にも、技術関係以外の職に就いている人も少なくない。卒業留学生の中には、通訳・翻訳業、観光サービス、教育産業、レストラン・ホテル経営、食糧品の輸出入業、輸送業等に携わったり、経営したりしている人もいる。日本側でも、技術以外の様々な職種に就いている人も少なくない。彼らも含むネットコミュニティは、多種多様の交流と、幅広い相互支援の可能性があり、双方にとって大きなメリットがあると考えられる。このようなネットコミュニティを実現することは、卒業留学生に対しても彼らの細かなニーズに合った対応やフォローが可能となると考える。

では、このネットコミュニティをどの様に実現しようとしてきたか。次節では試行錯誤して行ってきた実現への取組について述べる。

5. 実現への今までの取組

筆者は2007年に高専卒業留学生のネットワーク作りを開始した。当初、東京高専において、卒業留学生の住所すら把握されていなかったが、彼らが入学時に提出した保護者調書に記載されていた住所宛てに手紙を出し、その結果6カ国40人の卒業生と連絡を取ることができた。それをもとに彼らに各国別の支部作りを呼びかけた。さらに実際にマレーシア、インドネシアに出向き、支部作りを直接依頼した。しかし彼らと協議をしてみてこの依頼は無理であることが分かった。

まず、彼らは同じ出身国でも年度が違っていると交流はあまりなく、名前すら知らない人が少なくないこと、そして彼らの年齢は丁度仕事が非常に忙しい時期であり、支部作りまで手が回らないのが実情であることを理解した。

そこで筆者自身が日本でネットワークの本部を立ち上げ、時間をかけて各国で支部を担当できる人を育てていくことにした。しかし、当時筆者は高専の現職教員であったため、日常業務が非常に忙しく、本格的な取り組みは2年後の定年を待ってから行

うこととし、それまでは卒業生からの個人的相談（転職、進学、家庭問題等）をメールや電話で行い、繋がりを保つことを試みていた。ネットワーク構築の呼びかけは予定より少し遅れて2011年に再開し、インドネシア、マレーシアへ行き関係者と協議を行った。

ネットコミュニティは主に卒業留学生と日本人卒業生からなる。これらは言わば、車の両輪のようなもので、それぞれが充実することで、両者の一層の充実と発展が可能になる。

そこで、全国高専卒業生ネットワークを2011年に立ち上げた。24高専の34人の先生方が賛同者となり、ホームページを作成し（<http://all-kosen-net.jimdo.com/>）、適宜それぞれの高専の卒業生たちに呼びかけることとした。東京高専の卒業生グループが会の運営スタッフとなってくれた。しかし、全体に反応は鈍く、進展は少しずつでしかない。まだ目に見える程の成果を持たないネットコミュニティとしては当然のことであろう。

いくつかの高専の同窓会長宛てに手紙を出し、会の趣旨を説明し協力を求めた。回答は、趣旨は良く理解できるが自分の仕事で忙殺されている毎日なので協力する余裕がない、というものが殆どであった。高専の同窓会の連合会的な役割をもつ団体もあり、連携できないかと接触したが、ネットコミュニティ構想への理解を得るには至らなかった。また、特定の国へ、特別な働きかけをしている高専のOB会があり、そこへも連携・協力の働きかけを探したが、うまくいかなかった。

既に設立されている組織に対し、構成員が基本的に自由に活動するネットコミュニティは基盤が異なるものかもしれない。

その他、いろいろな連携や協力の試みを行ったがうまくいかなかった。しかし、時間が経つにつれ、状況に新しい変化が見られるようになってきた。

会員はFacebookでも募集しているが、最初は低調であった会員数は徐々に増え、この数ヶ月間には毎日数名の新規会員が登録されるようになり、会員は加速度的に増えている。2013年9月現在、会員数は235名（内卒業留学生91名）である。

まだ加入していない卒業留学生達から、自国の卒業生の会を作る支援をして欲しいとの要望もある。さらに、近年になって卒業留学生出身国のOB会（大学卒も含む）も作られていることが分かり、その会への呼びかけを行っている。そのような状況から、卒業留学生の発見と会員の獲得は、以前に比べてかなり容易になってきていると思われる。

ネットコミュニティは簡単に作れるものではない。しかし、機が熟してくるといろいろな結び付きが比較的楽に作られ、さらにそのことにより益々発展するという、自己増殖的な面も持つ。本会も今ようやくその機を迎えた感がある。

会員から寄せられている具体的な要望はまだ少ないが、卒業留学生から現在寄せられている要望には、「日本の卒業生との友人としてのコミュニケーション」、「食品輸出入について協力依頼」、「熱帯雨林を利用したイベントの共同企画」などがあり、技術相談等のテクニカルなものはまだないが、早晚現れると思われる。筆者の考えるネットコミュニティの企画としては、ホームページ（<http://all-kosen-net.jimdo.com/>）

を参照して頂きたい。

6. おわりに

本会は、主として海外に在住する高専卒業留学生および日本人高専卒業生によって構成されるインターネットコミュニティである。その特徴は、高専卒業生という信頼できる輪の中で、インターネットを通して会員が自由に要望を出したり、質問したり、協力し合うことができるものである。本部事務局は、これら会員間の連携の調整や、企画補助、取りまとめ等を行う他、新しい企画や計画などを全体へ提案し、会を育て豊かにしていく役割を持つ。

従って、構成員が多様で数が多いほど、構成員相互に大きなメリットがある。特に、海外に在住する卒業留学生にとっては、個人的な要望や質問、相談を表し易く、それらへの協力を依頼しやすい。このようなサポートは、大きな団体が実施している交流事業等によるサポートとはまた異なるものとする。

一番難しい問題は、どのようにしたらそのようなネットコミュニティを作ることができるか、ということであるが、本会の場合においては先述したように、長い時間と試行錯誤の結果少しずつ出来てきた。

具体的にサポートした事例報告を行うにはまだ至っていないが、会の基盤ができたことにより、今後活動はスムーズになっていくと思われ、次回もし機会があればその報告をしたいと思っている。